

3~6面 夏のプログラム報告

7面 高校生平和大使、世界YWCAへ

10月1日は
「国際ガールズ・デー」

日本・世界のガールズ
(10代、10代未満の少女)の今を知り、
ガールズが学校で、家庭で、地域で、世界で
活躍できるようアクションを起こそう。

*International Day of
the Girl Child*



藤原志帆子

Shihoko Fujiwara

特定非営利活動法人
ポラリスプロジェクトジャパン
代表

profile

米国NPOポラリスプロジェクトでの勤務を経て、2004年に同団体日本事務所「ポラリスプロジェクトジャパン」を設立。人身取引をなくすために、多言語の電話相談による被害の発見と救済事業を開始した。人身取引被害を受ける子どもや女性への現場支援の傍ら、児童施設や入国管理局での研修講師としても活動している。2008年母校ウィスコンシン大学マディソン校より名誉卒業生賞受賞。2012年AERA誌にて「日本を立て直す100人」に選出される。

ポラリスプロジェクトジャパンは、日本国内で起こる人身取引をなくすための活動を始めて9年目になります。比較的新しい団体ですが、フリーダイヤルの電話やメール相談を通して、これまでに150人以上の人身取引の被害にあった人々を支援してきました。人身取引の被害を見つけ出し、支援につなげる活動に行政からの補助はなく、支援活動は支援者の皆様からのご寄付と助成金でなんとか成り立っています。これまで主に強制的な売春などから外国人女性を救出するために支援をしてき

児童ポルノ問題

ましたが、2008年ごろから日本の子どもたちに対する買春やポルノ出演など、子どもの性的搾取の相談が徐々に増えていきました。子ども自身が相談してくれる場合もあれば、友人などを介して相談が入る場合もあります。児童買春・ポルノなど、子どもの性を利用する事件は毎年4000件以上あり、児童ポルノに関しては毎年過去最悪の記録を更新しています(警察白書より)。

多くの人は児童ポルノと聞いて

も、どのようなものなのかあまり想像ができないと言います。当団体の相談事例や、通報者から実際に送られてくる動画や画像は、「単なる子どもの裸」ではありません。子どもたちの身体を触り、レイプをしている映像や画像です。私たちは、届けられたDVDや画像の中に見える、こわばり、混乱した顔の子どもたちの表情を、なかなか忘れることができません。なぜこのようなケースが後を絶たないのでしょうか。それは児童ポルノへの絶えない需要があり、ビジネスとして成り立ってしまうこ

The Young Women's
Christian Association

YWCA

日本YWCAの使命(ミッション)
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

第31総会期主題
平和を実現する人々は幸いである—マタイによる福音書5章9節

10

OCTOBER
2013

No.716

www.ywca.or.jp

子どもたちの性被害に
「寛容」なこの社会に
変革を
国際ガールズ・デーに向けて



と、そして子どもの身体を犠牲にして違法に製造したボルノの取引が見逃されやすい現行制度に問題があります。

強制的な売春や、 援助交際が成り立つて しまう社会

虐待やネグレクトなどから逃げ出すために、家出をした子どもたちの受け入れ先が、売春・風俗産業になってしまふことが多々あります。私たちはここ数年、夏休みなど学校が休みになる時期にかけて、家出をし、数週間の路上生活や買春などで生き延びた少女を保護し、やっとの思いで福祉につなげたケースなどを数多く経験してきました。

ある10代前半の少女は、親が育児を放棄したことにより、親の代わりになって下の兄弟姉妹にご飯を作るなど世話をしてみました。彼女はある日そんな生活に嫌気が差して、遠い繁華街まで家出してきました。駅で座っているとさまざまな年代の男性から買春を持ちかけられ、中には「いつでも泊まりに来て

いいよ」と自分の家の鍵を彼女に渡す男性もいました。彼女は何か何でも家に帰らないために、実際にそのような大人の誘いに応じて性行為をして生き延びていましたが、数週間もすると心も身体も疲れてぼろぼろになっていました。彼女は当団体の相談窓口につながり、家に帰らない前提で保護に同意し、児童相談所の介入に至りました。しかし彼女の親や買春を持ちかける大人たちに対する不審感は未だ消えぬままです。

子どもが安全に生活できず SOS を発信すると、今度は SOS を出したその弱っている子どもたちを狙い、さらに心や身体を傷つけてでも利益を得ようとする人たちがいます。安心できる暮らしを送りたいと願う子どもたちの最終的な受け皿が、福祉ではなく性産業や売春であるというのはとても恐ろしいことです。

警察が検挙した事件だけでも年間数千件の児童買春・児童ポルノ被害があるなか、加害者への処分は諸外国と比べると軽く、加害者にとってこの犯罪はリスクになっ

ていないのです。また少女たちへの支援体制は十分でしょうか。当団体は、性的搾取の被害にあった児童には、専門家による心のケアが必要と考えます。多くの児童相談所では、スタッフ一人につき何十件の虐待のケースを抱えており、そんな中で買春や性被害を受けた10代の子どもたちに対し十分なケアをするのはとても難しいでしょう。

この現状を変えるために、まずは子どもを守りたいと思う親や地域で協力して、被害の現状を知り、私たちと共に社会に対し声を上げませんか。幼稚園から高校まで講演で呼ばれる度に、保護者や先生から「知らないことがどれだけ怖いことか知った」と言われることが多くなりました。自分の子どもだけでなく、地域全体で子どもを見守り、社会が一丸となって子どもの権利を守り育てていく—そういう社会を目指して今日から行動を起こしませんか。

自分の身に引きつけて考える

倉戸 ミカ

『自分には関係ない』。学校でデートDVの授業があったら、そう思っただろう。診療の合間に学校などで、性やデートDVの話をしている婦人科医の上村茂仁さんの講演を聞く機会があった。上村さんが話をする相手は、授業だからと思って仕方なく座っているかつての私のような中高生だ。「何かあった時、誰に相談する？ 大人には相談しない？ 怒られたり、頭ごなしにあしなさい、こうしなさいと言われたりするからね。友だちには話す？ 今日、友だちがそうやって話してくれた時に何かしてあげられるように、よく話を聞いてください」上村さんは中高生に、まずはそう伝える。そうすると、自分のことに引きつけて聞いてくれるそう。そうして聞いているうちに、『あれっ、物理の授業で同じ班の二人は、DVの関係にあるんじゃない？』と、身近な問題だということに気付く。

自分はどうかだろうかと考えてみる。これまでいい子で過ごしてきた優等生は、『まさか私が』と思ってしまう。知識としては理解しても、『自分は違う』と思ってしまう。「メールしたらすぐに返信しろよ」と言われて、『ちょっと束縛がきつくてしんどいけど、それって愛されてるってこと？』というように。

DVや虐待のこと、性暴力やハラスメントのことをよく学んで、自分のこととして考え、行動につなげたい。人間関係をめぐるあらゆる暴力に敏感でいたい。よく考えてみたら、自分が暴力を受けているかもしれない。自分が加害者かもしれない。問いかけることを忘れずに、日常のちょっとした会話や行動を通じて安全な場を少しずつ広げていきたい。

(横浜YWCA業務執行理事)

NPO法人ポラリスプロジェクトジャパン

お問い合わせ先(事務局)：050-3496-7615 /

info@polarisproject.jp

相談窓口：0120-879-871 (平日9時～18時)

soudan@polarisproject.jp (24時間)

ホームページ：http://www.polarisproject.jp/

夏の
プログラム
報告

2013年度 中高 YWCA 夏のカンファレンス

全国に35の中高YWCAがあり、毎年夏に3地区に分かれてカンファレンスを行っています。
来年は44年ぶりの全国カンファレンスを計画しており、中高生の出会いと学びの輪をさらに広げます。

東北・北海道地区



8月1日(木) 宮城学院中学校高等学校が担当し、茂庭荘を会場に5校から42名の参加で行いました。東北・北海道地区の特徴は、毎年、異なるテーマから参加校ごとにレポートを作成し、発表を行うということです。今年度は「人権」をテーマにレポート発表を行いました。

宮城県は東日本大震災の被災地でもあることから、日本キリスト教団東北教区被災者支援センター・エマオの佐藤真史牧師を講師として招きました。佐藤牧師からは、震災の直後と現在の支援のニーズが変わってきていること、翌日のフィールドワークとして行う被災地ボランティアの注意事項について学びました。2日目は仙台市若林区に入り、農場の整備を行いました。生徒一人ひとりが賜物を生かして真剣に取り組んでいました。

今回のカンファレンスには仙台YWCAから岩崎久美子会長が、福島YWCAからは渡辺園子前会長が参加してください、活動の報告をしてくださいました。これからもつながりを深めつつ歩んでいければと願っています。

肥田信長(とわの森三愛高校YWCA顧問)

関東地区

8月1日(木) 3日(土)の日程で行いました。参加者は7校56名、日本YWCAから2名でした。今年のテーマは「子どもの人権」でした。1日目は大磯の聖ステパノ学園を会場とし、戦後駐留軍兵士と日本人女性との間に生まれ、親と暮らすことのできなかった子どもたちのために力を尽くした「澤田美喜」とその施設「エリザベス・サンダース・ホーム」について学びました。聖ステパノ学園の小川正夫校長の主題講演、澤田美喜記念館の見学を通して学びを深めました。2日目は、今年度の準備を担当した横浜英和女学院を会場に、子どもたちのおかれている現状について考えました。この講演には大阪YWCAの会員で、HEALホリスティック教育実践研究所の所長の金香百合さんをお招きしました。また2日目の午後は横浜山手地区を散策し、夕食は全員で横浜中華街を訪れました。

松村 誠(横浜英和女学院中高YWCA顧問)

関西地区



8月7日(水) 9日(金)、広島女学院中学高等学校が準備を担当し、「核のない未来を求めて―日本に生きる私たち―」にしなければなら

ないこと」をテーマに8校から111名の参加で行いました。1日目は原爆資料館(平和記念資料館) 見学と、在日2世の許宗文(ほうちんぶん)さんの被爆体験を聞き、2日目には平和記念公園内の碑めぐり、「戦争中の日本の加害の歴史を知る」と題した広島女学院生からのプレゼンテーション、詩人アーサー・ビナードさんが昨年6月に広島女学院中学高等学校特別礼拝で語られたメッセージのビデオ鑑賞、広島女学院聖書科の矢野一郎先生のお話、「核廃絶! ヒロシマ中高校生による署名キャンペーン」実行委員の生徒たちのプレゼンテーションがありました。その中で生徒たちは、加害の歴史もきちんと知ることの大切さ、韓国、中国などに謝罪をするべき、広島・長崎を風化させない、他人事と思わない、核廃絶に向けて自分たちから発信していくことなど、これからできることを語り合いました。

松原恵美子(テール学院中高YWCA顧問)





「はじめまして」の旅は、ゲームで打ち解けることから始まる。

ことを、改めて考えました。この旅で私たちが毎回大切にしている視点、それは、広島の人々が原爆の被害者であるという事実と同時に、当時の日本

人はそこに至る戦争を引き起こした責任を負っているという事です。そして、旅の中で朝鮮半島や中国大陸を含むアジアの国々と人々を蹂躪した加害の史実を知り、考え、「過ちをおかさない」決意に繋げる事です。中国と韓国のYWCAからゲストを招いているのも、加害と被害の視点から共に考えるためなのです。十分とは言えない部分もありましたが、両YWCAの方と共に過酷な原爆被害について学ぶと同時に、日本の加害についても考えることができたと思います。



旅の学びをグループ毎にまとめ、発表しあう。

平和公園に立つ慰霊碑の祈りのことは「安らかに眠ってください。過ちは繰り返させぬから」もう二度と世界中のどこにも原爆を落とす戦争を繰り返さない、戦争が起きない世の中にならなければならないという決意——この旅の祈りと決意も同じです。

今年、日本に留学中のメキシコ・韓国・中国の大学生、そして韓国YWCAおよび中国YWCAからのゲストを加えた、中学1年生から70代までの計47名を参加者に迎えました。プログラムを通して、68年前の8月6日に広島、9日には長崎に落とされた原爆とは、そして、戦争とはいかなるものなのかということ

また表現してはいけぬものを参加者の心に残しました。あの日と同じ8月、真夏の太陽が照りつける厳しい暑さの中で「ひろしま」の街を歩き、最大限の想像力とありつた感性を研ぎ澄まして、実際のあの日のこと、そして現在に続く苦しみを本当の意味で感じ取り理解することなど到底できません。

「いろいろ感じた」とかいう簡単な言葉では表せない、

ひろしまを 考える旅 2013



毎年8月に実施している「ひろしまを考える旅」もすでに40年を超えますが、今回はある意味で記念すべき第1回目、公益財団法人になって初めての開催となりました。歴代の実行委員が議論に議論を重ねて組み立てた2泊3日の行程と、練り上げられたフィールドワークの上にある今年の旅についてご紹介します。



地下通信基地跡で、戦争体験を聴く。

心奥から絞り出されるような被爆証言。また、原爆投下前に人々が生活し、豊かな文化が息づいていたかつての原爆ドーム周辺の様子を描いた、映像作家・田邊雅章さんのCG作品、そして自らも幼い時に頼るべき肉親を失った田邊さんの激しい心の叫び。そのいずれも、「たくさん学んだ」とか

「いろいろ感じた」とかいう簡単な言葉では表せない、また表現してはいけぬものを参加者の心に残しました。あの日と同じ8月、真夏の太陽が照りつける厳しい暑さの中で「ひろしま」の街を歩き、最大限の想像力とありつた感性を研ぎ澄まして、実際のあの日のこと、そして現在に続く苦しみを本当の意味で感じ取り理解することなど到底できません。

抗議文を出しました

政府閣僚による8月15日の靖国神社参拝、「不戦の誓い」やアジア諸国に対する戦争の損害・反省について首相が言及を避けたことを受けて、日本YWCAは、2013年8月19日、抗議文「閣僚の靖国神社参拝に強く抗議します」を、安倍晋三内閣総理大臣へ送りました。抗議文は、www.ywca.or.jpから、または日本YWCA事務所へお問合せください。

ひろしまを考える委員会
委員長 津戸真弓



エネルギードリームセンターで発電体験。

上に気持ちで繋がることが出来ます。勉強すること、壁を超えることができます。未来の子孫にこれ以上の負の遺産を背負わせるないように、勉強し、考えていか

なければならない。知らないという事はひどく無責任で、恐ろしいことであると強く感じました。例えば、送電塔の問題。原子力発電所のもたらす放射能だけに止まらなかった。しかし、そこで作られた電気を都市部に送るための送電塔の建設においても、「経済的な理由」で弱者が犠牲にされ、理不尽な事態が今も起こっています。今回、韓国の密陽送電塔建設で起こっている現状を初めて知りました。驚きだけでは済まされない、たくさんの感情が過ぎました。



グループワークで話し合い、成果をまとめる。

「日本と韓国は運命共同体」という言葉が、講演会、ディスカッションの中で多く出ました。韓国にも23基の原発があります。東京電力福島原発から放出された放射能は、国境など関係ありません。流出した汚染水は地球全体を包む海に流れ出て、風は汚染した空気を運びます。これが福島ではなく、もし韓国・釜山の古里原発であれば、日本国民はど

運命共同体にある、東北アジアの私たち

韓国のユースとディスカッションをしているとき、私はバベルの塔(注)を建てようとした遠い祖先を恨みました。そして、ひょっとしたら、原子力がそれこそ神話のように語り継がれ、何万年後かの遠い子孫が私たちと同じように恨むかもしれません。そんなことがふと頭をよぎりました。しかし、分たれた言語は、それ以上

なればなりません。知らないという事はひどく無責任で、恐ろしいことであると強く感じました。例えば、送電塔の問題。原子力発電所のもたらす放射能だけに止まらなかった。しかし、そこで作られた電気を都市部に送るための送電塔の建設においても、「経済的な理由」で弱者が犠牲にされ、理不尽な事態が今も起こっています。今回、韓国の密陽送電塔建設で起こっている現状を初めて知りました。驚きだけでは済まされない、たくさんの感情が過ぎました。

も衝撃を受けました。きつと、知らないというだけで、知らなければならぬことはまだまだたくさんある。しかし、ごく一部であるかも知れないけれど、今、理不尽な状況が溢れていることを私たちは知っていました。知らなければ何も出来ず、知らないことでの無責任と、知ったことの責任があります。知ったからには、私たちはもう知らなかった頃のままでいてはいけません。いでしょう。

日韓ユース・カンファレンス 2013

1993年に始まった日韓ユース・カンファレンスは、今年で20年を迎えました。毎回、日韓両社会に共通するテーマを取り上げ、寝食を共にしながら課題解決のためのアイデアを出し合いながら。今年は「私たちの国における、原子力発電をとりまく状況」をテーマに8月23日(金)～26日(月)に韓国・ソウルで開催し、日本から18名、韓国から22名が参加。講演では、韓国・密陽(ミルヤン)で巨大送電塔の建設に反対する住民たちについて学び、フィールドワークで訪問したエネルギードリームセンターでは、採光・断熱や自家発電によってエネルギーの効率利用を追求した建物を見学しました。また、旧日本軍が抗日活動家を幽閉した西大門(ソデムン)刑務所歴史館では、今も残る戦争の爪痕を目の当たりにしました。楽しい交流会やディスカッション等もあり、さまざまな要素で組み立てられた充実の3泊4日を過ごしました。



最終日。共同声明を読み上げ、東北アジアの平和の願いを書いた風車を緑の大地に立てた。

のように考えたでしょうか。世界一の原発密集地帯そして海に囲まれ、地震も珍しくない。日韓の私たちはまさに「運命共同体」なのです。

日韓の間には、さまざまな問題があることは事実です。しかし、それを越えて私たちに何ができるか、それを本気で考える4日間であり、私にとってただの「隣国」だった韓国は「運命共同体」になりました。

私たちがいきなり電気を一切使わない生活をするのは、確かに不可能かもしれませんが、しかし立ち止まって、これは本当に必要なことを噛みかける、さまざまな犠牲の上に生活があることを噛みしめる、それだけで、きつと世界は少し変わることが出来ます。またまた課題は山積みです。そして、この4日間だけですべてやり切ることはできません。もっと話したかった、もっと考えたかった、もっと知りたかった。私ができることは、このカンファレンスを通して知ったことを伝えていくことです。

日韓ユース・カンファレンス2013実行委員長 東京YWCA会員 吉田夏子

注：旧約聖書の一説。人間が皆同じ言葉を使っていた時代、人間は欲にかられて夫々、舌を建て、神の怒りに触れた。神は人間が一度このようなことをしないうちに、言葉をばらばらにした。

日韓のユースたちが、共同声明を発信

カンファレンスのまとめとして、参加者たちは、核・原子力からの脱却を求める共同声明を発信しました。これからも、共通の問題の解決に向けて、また東北アジアの平和のために協力し合うことを確かめ合い、今年のプログラムは幕を閉じました。

共同声明はこちらから：www.ywca.or.jp



子象ババール被災地をめぐる

日本YWCAに後援団体として名前を連ねていただいた、被災地に音楽を届ける「子象ババール被災地を巡る」プロジェクトは、すべての日程を無事に終え、8月12日の実行委員会をもって完了いたしました。この活動は震災後1年に当たる昨年春、チェコからチェリストのヴラダ・コチさんとヴァイオリニストのヴラダ・ルチエさんを招いて、首都圏で4回のコンサート、被災地5か所で7回のコンサートを行ったのに続き、今年で2度目となります。

今回は6月22日に紀尾井サロンホール（東京都）、7月8日に逗子なぎさホール（神奈川県）でコンサートを行いました。その収益によって7月18日から21日までの4



日間、いわき・三春町・南相馬（福島県）、石巻（宮城県）の4か所で6回のコンサートが実現しました。3名のプロの女性音楽家、ピアニストの南日美奈子さん、メゾプラノの田辺いづみさん、語り手の鶴野峰子さんによる満身の生演奏に、子どもも大人も心を吸い取られたように聴き入って、楽しんでくださいました。

福島は状況は未だ厳しく、どの幼稚園の園庭にも大きな線量計が鎮座し、何度も除染された園庭にも拘わらず、外遊びの時間は限られ、飲料水も水道は使えません。その中で心を育てる保育に懸命に取り組まれている先生たちの姿に、頭が下がる思いでした。被災地で日々を暮らす方々の状況やお気持ち、アンケートの文面から伝わってきます。その感想を被災地の声として紹介させていただきます。

「心のこもった時間をありがとう。いつまでも続く不安に、いわきは疲れています。人口の一割ほどの避難民がいます。理解してとは言えないけれど、ありがとう」（平バプテスト教会）



『子象ババールの物語』フランシス・ブランクが1945年に作曲したピアノと語り手のための音楽物語

夏休み・子ども保養プログラム

原発事故による放射能の影響から子どもを守るため、2011年より継続的に、全国の各地域YWCAが保養プログラムを実施しています。今夏も9地域で行いました。福島YWCA（7/20）、東京YWCA（7/27～31）、京都YWCA（8/2～9）、大阪YWCA（8/2～9）、呉YWCA（8/8～9）、静岡YWCA（8/9～11）、函館YWCA（8/16～19）、名古屋YWCA（8/19～23）、福岡YWCA（8/22～24）。皆様からの「東日本大震災被災者支援募金（ピーチリボンキャンペーン）」は、これからプログラム実施のために用いられています。

「保育士をしている者ですが、心から笑っているように感じています。大人もそんなのかもしれない。歌を聴いていると頭の中にあるような情景が浮かびます。心が動きます。身体をゆすつてみたくなります。音楽は心の潤滑油なのかも知れません」（南相馬市原町聖愛保育園）

「久しぶりに生演奏を聴かせていただきました。震災後この近辺のみなし住宅に暮らしている者にとって、しばしのホッとした時間でした」（石巻山城町教会）

「感動し、涙が出ました。放射能の不安も吹き飛んで、希望をもって生活していきたく切に願っております。前向きに前向きに歩んでいきます」（南相馬市民文化会館ゆめはつと）

ババール・プロジェクト実行委員会
遠藤真理

（種）

あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。（ヨハネによる福音書15章16節）

「選ぶことは、苦しいこと」——小さな礼拝で、一人の学生が語った言葉です。社会のさまざまな事柄や問題を知れば知るほど何かしたくなる。関われば関わるほど不誠実さは嫌になる。けれども私の体は一つ、私は一人。「選ぶことは切り捨てること」と詩の言葉を引用し、しかし選ばなくては愛することができないのだと、その詩の結論に深く納得していました。

選ぶ自由があることは、恐らく一般にはよいことです。けれども時に私たちは「選ばなくてはいけない」ことを、苦しさと共に実感します。小さな自分の一つの選択。その重みを知り、時に裸き、時に震えます。

だからこそ、この御言葉の逆転の不思議さに、心捕らわれ、立ち止まります。選択に選択を重ねて生きてきたその道すがら、実は私が選ばれていた。そこにあるのは特権ではなく、また何の報いでもありません。永遠なる方の深い眼差しの中で知る、知らなかった自分との出会いです。恐れを取り除き、喜びを満たして頂いて、今日も小さな選択を重ねます。体は一つ、私は一人。この日はただ、一度きりです。

北中晶子
国際基督教大学教会牧師

高校生平和大使、世界YWCAジュネーブへ

高校生平和大使は、1998年の「ながさき平和大集会」を契機に発足し、毎年8月に国連機関や世界YWCAなどの国際NGOを訪問し、核兵器の廃絶と世界平和の実現を訴えてきました。高校生平和大使の真剣な言動は、国連をはじめ訪問先の各国で高い評価を得、大きな成果をあげています。「高校生三万人署名活動」が集めた署名は、今年100万筆を突破しました。今年の高校生平和大使には、長崎の活水高校から参加したメンバーや、岩手県、福島県の高校生も含まれています。

日本からの高校生平和大使（以下、平和大使）は、強い熱意を持って毎年ジュネーブを訪れ、広島・長崎に落とされた原爆の経緯を共有することで、68年前に日本が受けた残酷な攻撃を語り継いでいます。

1945年8月、当時軍都であった広島が、世界第二の規模の原子爆弾の標的とされました。ほんの数日後、長崎にも原子爆弾が投下されました。2つの町は激しく破壊され、おびただしい数の命を失いました。この非人道的な攻撃は、その後も長期にわたり、人々の健康と生活の上に影を落としました。そして、日本、および日本の人々は、自国の第二次世界大戦への関わり、また広く知られた争いの歴史を顧みて、戦後、平和への永遠の誓いを立てました。

今年も、日本全国から集まった27人の平和大使が、ジュネーブの世界YWCA事務所を訪問し、その後例年通り、世界的な核軍縮の必要性を強く訴える公式な請願書を提出するため、国連軍縮局を訪れました。請願書には、世界中の人々から104万1,679筆の署名が集まっています。

原子爆弾・核戦争の影響は世代を超え、今では被爆者の3世・4世が平和大使の多くを

占めています。平和大使たちは、自分たちの家族の話語り伝え、原子爆弾の恐ろしい影響について伝えることで、より多くの人が核戦争の危険性について理解し、自分たちの国が決してこのような行為をしないよう説得してくれることを期待しています。

何人かの平和大使は、2011年3月の東日本大震災・津波がもたらした、東京電力福島第一原発事故により被災しており、その

体験は核の恐怖を再び呼び起こすものでした。彼女・彼らは当時のことを「怖かった」と振り返り、緊急避難、家を失ったこと、原発の爆発による深刻な高濃度放射能汚染などについて語りました。この経験は、平和のために活動したいという平和大使の意志をさらに強くしました。

平和大使の旅路、そして過去に経験した恐怖を誠実に、正直に記憶していく彼女・彼らの姿勢は、平和の必要性への気づきと理解を世界的に広めるため、必要不可欠なものです。この若い平和大使たちが、これまでの世代の努力を引き継ぎ、反戦のメッセージを広めることを選んだことは、私たちに大きな勇気を与えてくれます。平和大使たちの尽力によって、いつかきつとすべての世代が、大使たち自身のように平和を求めて行動するようになるでしょう。

(本文/世界YWCA www.worldywca.org
訳・編集/日本YWCA)

YWCA-YMCA合同祈禱週2013

世界YWCAと世界YMCA同盟は、毎年11月の第2週目の日曜日を起点とする1週間を合同祈禱週とし、1904年以来毎年、共に祈りを守ってきました。この一週間は、YWCA-YMCA運動が、よりよい世界を実現するための基盤となる魂のビジョンを再確認するためのひと時となります。今年のテーマ、Be the Change「神の求める『変革』となる」では、世界各地で活動する筆者の具体的な実践や、考え、アイデアを紹介し、私たち一人ひとりが生活から社会、世界を変えていく『変革』そのものになることを提唱します。

テーマ:

Be the Change 神の求める『変革』となる

◆日程: 2013年11月10日(日)～11月16日(土)

◆日毎のテーマ:

- 第1日: 私たちは神から召された存在です
- 第2日: 神は「私」に求めています
- 第3日: 「Ubuntu」—あなたがいるから私がいる
- 第4日: 私こそが「変革」。私を変えようとする神の呼びかけに答えて
- 第5日: 行動への呼びかけ。私たちは性による不平等に取り組みます
- 第6日: 変革の道具として。YWCAとYMCAは神の道具として働きます

(仮訳 日本YMCA同盟)

夫と呼ぼうキャンペーン

YWCAは長年、女性と子どもの人権を守る働きを各地で行ってきました。女性に対する差別や暴力について、一人ひとりの声を聴き安心の場を創り、専門家の助言を得、女性の団体としてその結果を社会へ提言してきました。今総会期発足した日本YWCAジェンダーチームは、こうした活動の礎石となるジェンダー意識(社会的文化的に期待される性役割)を改めて問いかけるために、「夫と呼ぼうキャンペーン」(期間2013年5月～2014年3月)を展開しています。

あなたは自分の、または他人の配偶者やパートナーを何と呼んでいますか。「(御)主人」「旦那(さん)」「うちの夫(さん)」「彼氏」...等。たとえば呼び方を「主人」から「夫」に変えてみたら、何か変わることはありませんか。このキャンペーンでは、たかが慣習的な言葉遣いだと侮らず、呼び方を通して私たちの身近な周囲の男女の関係を考えてみることで、真に平等な関係のあり方や、個人の確立とそれを前提とした繋がりについて、話し合おうきっかけにしたいのです。女らしさや謙虚さが知らず知らず刷り込まれている歴史的文化的背景や、親密な関係に潜む支配・被支配関係に気づくことにも繋がります。結婚を前提にしたり、「夫」と呼ぶことを勧めているわけではありません。ただ、家族のあり方や性のあり方が多様になっている一方、保守的な家族像を押し付けよとする流れの加速も顕著です。今一度ジェンダー意識と個人の確立を問い直す意義は大きいのです。

各地の地域YWCAで身近な問題を引き合いに、語り場「女子会」を持ったり、ジェンダーをテーマに川柳大会や、スキット作成、ワークショップの開催などを呼びかけています。一緒に考えてみませんか。

日本YWCAジェンダーチーム長 山高万寿子

エンパワーするNGO



大阪YWCA

中高生のカラダとココロのエンパワメントを考える

世界YWCAが掲げる「性と生殖に関する健康と権利」やHIVおよびAIDSの課題を、世界YWCA機関紙『モンコンサン』から知り、連続講座『ポジティブに生きるって!?』HIV・AIDSから考える私のカラダとココロを2011年度に開催。それに先立ち、講座を担当する委員の勉強をかねて、読書を重ねました。少人数でしたが、毎回ホッとできる、そしてホットな場となりました。当然「性」の話題も含むこの会では、「安心してオープンに話せる場

が大切」異世代の人と話せてよかったとの感想が毎回出ました。

この連続講座、実は「中高生のサポートー養成講座」と銘打っていて、20代の学生や社会人が中高生をサポートするチームづくりを目指していたのですが、30代、40代からの問い合わせの方が目立ち、世代を超えた課題なのだを再認識。

それ以降も仲間探しは続き、昨年度は「カラダとココロにきく語り場」を開催。「初対面の人とも深い話ができた」「ジェンダー、経済、教育のことまで刺激を受けた」「こんな場を中高生と持ちたい」など勇気づけられる感想が寄せられました。

中高生と共に学びたいのは、いのちの素敵さ、カラダやココロの健康、自分はあるのままでよいという感覚、そして、人とつながるコミュニケーション力。さらに、そのことにまともに向き合う大人集団をつくりたい。

これを誰がやるの？Yでしょーと思うのですが、試行錯誤を繰り返して、フレームワークづくりの段階で未熟さに直面しています。今後の動きにご注目ください。



大阪YWCA国際部 宮崎祐

ご協力ありがとうございます

大野綾子 中本かほる 桐村巨子 早田紀子 伊野尚子 北原恵美 齊藤純子 難波郁江 都木恵子 得永道子 井上依子 石川松子 日本キリスト教協議会女性委員会 世界祈禱日 東洋英和女学院中高阶宗教委員会 日本レクリエーション協会

編集発行人 石井摩耶子 偶数月1日発行 定価1部 50円 年間購読料 660円(送料込) 振替 00170-7-23723

- 渡辺文子 外崎弘子 大澤恵美子 大野綾子 大野 肇 木田みな子 梶山順子 片山 恵 横山キミイ 島田麗子 諏訪昭子 田村三保子 田中倍子 西村律子 高橋須賀子 早田紀子 町田裕子 富田美樹子 三宅文子 三宅泰子 中平多恵子 吉田瑠都 渡辺順子 赤石めぐみ 和田妙子 小川郁子 森際真知子 川村悦子 桐村巨子 奥平せい子 小林多美 清水嶋孝 小谷野淳子 角田 健 松岡信子 高月三世子 鈴木 榮 奥平せい子 長尾真理子 水野潔子 村上知子 佐竹美美子 磯貝聡子 荒井重人 永井千代子 藤岡綾子 布村美弥子 近藤真由美 青木基子 阿武 桂 布村美弥子 阿部方子 今井美奈 有賀三奈子 篠山淳子 首藤和子 杉田佐紀子 汐崎貞子 田村セツ 田村恵美子 野田澄子 古川道子 坪田未沙子 渡辺聡子 秋元靖子 五十嵐康子 北原恵美 小谷充子 渡辺美恵子 北野あや 眞野あや 松村ユカリ 毛利亮子 石川和子 中田美紗子 毛野花枝 眞野あや 中田美紗子 石川松子 井出 都 小野寺富子 浦田伸子 田口美穂 木下由美子 伊原左恵 松田和子 平木貴美子 原美左恵 遠藤洋子 具島美佐子 叶 路子 齊藤純子 稲葉和寿子 志賀洋子 安江恵津 稲垣美奈子 吉田紀子 大川直子 朽木美奈子 鈴木伸子 長堀滋子 斎藤佐智子 鈴木伸子 江崎啓子 大工原則子 古川道子 丸田昭江 幡江美智子 一杉静子 田崎桂子 幡江美智子 梅林宏道 三宅純子 望月和子 仁科謙太郎 J.E. ランデス ランデス ハル 深田光代 岸田寛子 得永道子 山田純子 小川和子 野呂幸子 山田純子 小川和子 野呂幸子 須部 暁 山内明子 鈴木恭子 森 暁子 田沼祥子 河津百合 都木恵子 湊 暁子 米原静子 小泉進子 比企敦子 宮澤玲子 土屋幸子 芳川雅美 兼清和子 鴨打美津 五味優子 高橋敬子 萩原 正 阿部幸子 岩崎妙子 中島潤子 原美板子 水野雅子 江尻礼子 中橋美鈴 荒川知子 梅本弘子

- 多文化共生ファンド 世界で助けが必要としている女性と子どものために 山順子 伊野尚子 田村三保子 荒井重人 阿部方子 北原恵美 石川松子 得永道子 静岡YWCA (パレスチナYWCA活動支援募金) 日本キリスト教協議会女性委員会 世界祈禱日 オリーブの木キャンペーン募金 梶山順子 田中倍子 全ウソフイ 北原恵美 齊藤純子 田村三保子 高橋敬子 坂和 優 富岡美知子 高橋敬子 得永道子 高月三世子 横山正代 北村和子 広島YWCAを支える会 東日本大震災被災者支援募金 小川和子 島田麗子 佐々木三子代 小松郁美 早田紀子 山高万寿子 伊野尚子 荒井重人 田村三保子 篠原純子 渡辺文子 高月三世子 阿部方子 北村和子 近藤真由美 首藤和子 汐崎貞子 横山キミイ 北原恵美 伊藤いく代 丸田昭江 田村恵美子 田村恵美子 田口美穂 坪田未沙子 松田和子 伊藤眞代 柴田純美子 平田智彦 平田美佳 由良善久子 叶 路子 齊藤純子 松村ユカリ 安江恵津 鈴木伸子 小野寺富子 神山妙子 一杉静子 多喜百合子 金子宏子 山内明子 仁平のぞみ 田沼祥子 都木恵子 幡江美智子 古川道子 中村紀子 池上三喜子 宮川道子 高柳博一 長尾眞理子 高橋敬子 阿部幸子 久宗百合子 野呂幸子 得永道子 中峠由里 佐藤淳子 本多道子 橋本聖子 渡辺順子 J.E. ランデス ランデス ハル 特定非営利活動法人福島ライフイベント パーブルプロジェクト実行委員会 浦和YWCA 福島YWCA 広島YWCAを支える会 (2013年6月21日〜8月20日現在 敬称略)

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室 Tel.03・3292・6121 Fax.03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp